

随 想

## 卒業にあたって

張 辛茹

除夜の鐘と共に1996年がやってきました。私も日本へ来て5年目になり、今年の3月に学位をもらって卒業します。卒業したら、学生から社会人になります。あと少しで学生時代が終わってしまうなと思う度に、長い学生時代の楽しいこと、悲しいことを色々と思い出します。

教育制度については、中国も日本と同じ、六、三、三制であり、中学校までは義務教育とされています。そうは言っても辺鄙な貧しい所では小学校しか出ていない子供が沢山います。大学のほとんどは四年制ですが、医科大学の場合は、五年制、又は六年制となっています。日本とちがい、医学部の大学院は修士課程と博士課程に分かれていて、各々三年間となっています。ご存知のように中国は人口が多く、大学の数が相対的に少ないため大学進学競争が日本以上に激しいのです。私の大学、大学院時代（1981年－1989年）の中国は、純粋な社会主義で学校は国立しかありませんでした。当時の大学生は皆学校の寮に住み、授業料、教科書、白衣など全て無料でした。しかし社会主義も良いことばかりではありません。以前は教育に関する費用はただの代わりに卒業した後の就職は、すべて国から指定され、行きたくなくても国のためということで、服従しなければなりません。しかし改革、開放以後の中国は、教育制度の改革も行われ、私立学校もできました。国立大学でも寮費や、授業料などを払うようになりました。卒業生も自分の就職口を探し、求人面接を受け、双方の同意の上で勤め先が決まります。中国が自由、民主の社会になってきていると言えると思います。

時間の経つのは速いもので、四年前に初めて名古屋大学医学部放射線教室に来たのがまるで昨日のことに思われます。この四年間の研究、勉強を通じて、学問的な知識や研究の進め方の手法など得ることが沢山ありましたが、その中でも印象的なことが二つありました。一つは、日本の大学の各研究室でのセミナー制度です。セミナーというのは、教室での定期的な勉強会です。教室全員が順番に各自の研究の進展状況、疑問点、結論などを紹介し合う場です。この場を通じてお互いに他人の研究を知ることができます。それと同時に自分

の視野を広めることもでき、大変友好的な良い手段だと思います。帰国したら研究室で紹介したいと考えています。もう一つは、地方会など学会に参加する機会が多いことです。学問的な角度や研究者自身の進歩から見ても学会に参加するなどの交流は大変重要です。日本では色々な学会が多く、学生も参加できることは羨ましいことです。中国では、まず学会は日本ほど多くはなく、また経済的な面からも学生が参加する機会は少ないという現状にあります。

今では、日本語を理解できるようになりましたが、日本に来るまでは日本語はほとんどできませんでした。大学院に入って先生の話が理解できるかどうか、又卒業できるかどうか心配していました。研究室に来て、石垣武男先生、小林英敏先生に言葉の壁がありながらも研究から生活の面まで教えていただき、感謝しております。無事に卒業できるのも先生方のおかげです。

最後に石垣武男先生、小林英敏先生を始め多くの先生方のご指導、ご協力をいただいたことを心より感謝しております。皆様どうもありがとうございました。

衷心感謝各位老師和朋友。

(名古屋大学医学部大学院生)